



【新年礼拝説教】 2019年1月1日

説教題 早朝、鶏の鳴く前に

聖書 ヨハネによる福音書 18章 12～27節

説教 武田 真治

1、鶏が鳴く時に

新しい年の最初の日に礼拝に招かれ、礼拝で始められる幸いを感謝します。今年も礼拝から礼拝へと歩みを進めるなかで主の御言葉に導かれて行きたいと願います。

今朝、皆様は一年最初の鶏が鳴く声をお聞きになられたでしょうか？ もはや広島市内ではめったに鶏の声は聞けませんね。ペトロが鶏の鳴く前にイエス様のことを三度も否定してしまったことは四つの福音書すべてに記録されています。それだけ重要な事でした。ただ、ヨハネだけはこの出来事の中に「アンナス」という人物を記録しています。この人物は何者でしょうか？

2、イエス様を殺した影の黒幕

ヨハネによる福音書は、他の三つの福音書よりも後に書かれたと言われています。そうであれば、イエス様の十字架の出来事もより深く、また客観的に検証することが出来たのではないかと考えられます。後になってよく分かって来たこともあったでしょう。

まさにイエス様を捕まえた者たちが、この時の大祭司であったカイアフアよりも先にアンナスという人物の許にイエス様を連れて行っているという事実が、イエス様を捕まえよと特に強く命じた張本人がこのアンナスだったと考えられるのです。この人物がまさに黒幕であり、すぐにはしっぽを出さず、後から徐々に判明したことであったのでしょう。故にヨハネは何よりこの人物について記す必要を感じたのでしょう。

なぜ、そんなことが言い得るか。この人物はAD6年にユダヤ教の大祭司に就いてからその権威と特権を使って、権力を拡大し私財を蓄えました。その傍若無人さがあまりにも酷いため、ローマ総督グラトゥスに嫌われAD15年に大祭司の職を追われたのでした。しかし、その後も自分の息子を次々と大祭司に任命し、影の大祭司として君臨します。カイアフアも実は彼の娘婿でした。故にヨハネは彼のことも「大祭司」と呼んでいるのです（19節）。

そして、このアンナスとイエス様との関係は、イエス様がエルサレム神殿で宮清め（＝両替人の台をひっくり返し、献げ物を売る者たちを追い出し「わたしの父の家を商売の家にするな」と叫ばれた）を為さった、あの商売人たちが神殿内に居た場所が《アンナスの市場》と呼ばれていた所だったのです。そこはアンナスが取り仕切っていた市場であったのです。つまり、神殿に来る巡礼者たちを狙って商売をする者たちを許し、その代わりに場所代を徴収し、かつ売上金の一部を上納させ、私腹を肥やしていた人物がまさにアンナスであったのです。その場所から商売人やその売り物を追い出されたイエス様の行為は、当時のエルサレム神殿の在り方を否定されただけでなく、神殿を食べ物にする者たちとその集金システムを破壊する意味も持っていたのでした。アンナスにとっては自分の特権を脅かされる行為であり許せないと思ったこ





とでしょう。彼がイエス様をこのままにしてはおけないと殺害を画策したであろうことは充分考えられることであったのです。イエス様暗殺の黒幕の一人でした。

3、尋問されてもなお

アンナスはイエス様に対して「弟子のことや教えについて」尋ねています。このような質問をする意図は、イエス様だけでなく弟子たちやイエス様の教えを受けた者たちをも更に捕えようとしていると考えられます。この機にイエスに従う一味を一掃しようとしていたのです。

それに対しイエス様は「わたしは、世に向かって公然と話した。わたしはいつも、ユダヤ人が皆集まる会堂や神殿の境内で教えた。ひそかに話したことは何もない。なぜ、わたしを尋問するのか。わたしが何を話したかは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。」と答えておられます。これは自分が秘密結社のような特定のグループを持たないでいつもみんなに向かって語ってきたので、特別に教えを授けた者たちや特定の弟子という存在はない、そのことはみんなに聞けば良いという意味です。つまり、弟子たちが特定されて捕まえられないことがないようにしておられるのです。ここに至ってもなお弟子たちを守っておられることがよく分かります。

これより先、イエス様はゲッセマネの園で兵士たちに捕まる際にも、「わたしである」と自ら名乗り出られました。それは「わたしを捜しているのなら、この人々（＝弟子たち）は去らせなさい」と、弟子たちに危害を及ぼさせないで逃がすためでした。まさに「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした」（18章9節）というお言葉通りでした。このようなイエス様の姿は「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」（13章1節）ことを何より表しているのではないのでしょうか？ その愛は私たち一人一人に今も注がれています。なぜなら、イエス様はその告別説教の中で「また、彼ら（＝弟子たち）のためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる（ようになるであろう）人々のためにも、お願いします。」（17章20節）と、弟子たちの後に続く信仰者たちのことをも含めて「彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださる」ようにと祈っていて下さるからです。

4、ペトロの否認

しかし、まさにそこに弟子の一人であるペトロが居合わせていたのです。彼は、捕まえられたイエス様を心配してこっそり後をつけて来たのです。そして大祭司の屋敷の中庭へも入ろうとしたのです。

この中庭に入るためには、門を通り抜ける必要がありました。その「門番の女中」がペトロを見て『あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか』と問い詰めたのです。イエス様の弟子であることが判れば中に入れてもらえないばかりか、自分も捕まえられることになると思った彼は、とっさに『違う』とイエス様の弟子であることを否定してしまうのです（17節）。この否認をしたことで中庭には入れましたが、イエス様を裏切ってしまっただけでなく、自分のこれまでの生き方をも自ら否定してしまったのです。

さらにその中庭でペトロは立って火にあたっていたところ、その火に顔が照らされたことで人々に、『お前もあの男の弟子の一人ではないのか』と指摘されてしまいます。「人々」とあり





ますから、大勢の人が「そうだ、そうだ」と言ったということでしょう。彼はあわてて「打ち消して『違う』と言った」のでした（25節）。またもやイエス様の弟子であることを否定してしまったのでした。もはやペトロはこの中庭を出て行くこともままならない状態になったと言ってよいでしょう。すぐに出て行けば『逃げた』と思われるでしょうから。

考えてみれば、最初の否認は、まだイエス様の後をついていくためには嘘をつかなければならなかったので仕方がなかったと言い訳ができるかもしれません。しかし、二度目の否認は明らかに自分の保身のために、イエス様を裏切ったことになり、もはや弁解の余地はなかったのです。

イエス様が、裁判にかけられ尋問されている中でも弟子たちを最後まで守られた姿と比べ、このペトロの姿はなんと情けない姿でしょうか。

5、「鶏が鳴いた。」

ペトロがそのままそこに居ると「大祭司の僕の一人で、ペトロに片方の耳を切り落とされた人の身内の者」が、ペトロを見つけて『園である男と一緒にいるのを、わたしに見られたではないか』と指摘したのでした。これは目撃証言と言い得ます。もはや否定できない状況でした。ところがペトロは「再び打ち消した」（27節）のでした。もはや自分の保身のことしか考えられなくなっていたと言い得ます。その時「するとすぐ、鶏が鳴いた」のでした。

これはかつてペトロがイエス様に「あなたのためなら命を捨てます」と言い切った時に、イエス様が「はっきり言っておく。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう」と言われた言葉（13章38節）が本当になったことでした。ルカによる福音書では、彼はこの「主の言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた」と記されています。自分の愚かさをつくづく思い知らされ、イエス様への申し訳なさに後悔の涙を流したのです。

しかし思うのは、この自分の愚かさ泣いたペトロだからこそ、この後に復活のイエス様と再会した時に、こんな自分をも赦して下さる慈愛に触れ、真の喜びを感じ、二度とこのような愚かさを繰り返さないと心の底から思えたのではないかと。

鶏は鳴くことで新しい朝が来たことを教えてくれます。イエス様がわざわざ「鶏が鳴くまでに」と言われたことは、そこで古いペトロが死に、新しいペトロに生まれ変わる時が来たことを示されたのではないかと思います。まさにペトロの新しい朝＝復活がここから始まったのでした。

（説教より抜粋、編集）

